

江戸ソバリエ、日中蕎麦の根文化交流：観光編

江戸ソバリエ第二次北京プロジェクト

☆首都北京

*天壇

中国という国では、神仏や皇帝より天の方が偉大である。だから皇帝が天に祈る。その場が天壇である。考え出されたのは、前漢の末頃らしい。その天とのコミュニケーション手段として、つまり天に見てもらおうための漢字が誕生した。だから漢字は読む字ではなく、見る字である。アルファベットの soba は読む字、漢字の蕎麦は見る字というわけである。

したがって、「蕎麦の字が読めない」というのはまちがいである。蕎麦の字は蕎麦だと覚えるのが正しい。

ここ、北京の天壇公園は、明時代に造られた施設であるという。

地上の王者が天帝に祈った場の跡だという円形の石の上に立って、天を仰ぎ見てみた。真っ青の天だった。



【天壇夜景】

(ほしひかる)

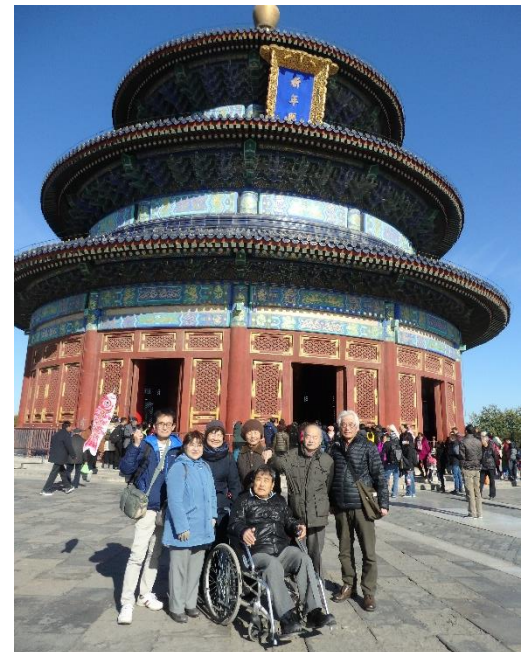


【地元のご婦人と合唱交流】

天壇公園は天候に恵まれた。その上、歩行困難になった私を仲間たちが車椅子でお世話してもらった。嬉しくもあったが、複雑な心境でもあった。公園では地元のおばちゃんグループと日本の歌「里の秋」を合唱できたことは楽しい思い出になった。

(平林知人)

天壇公園での地元ご婦人との歌の交流会は、言葉は通じなくても歌(曲)は世



界を繋ぐことを実感した。「北国の春」は中国でもモンゴルでも唄ってた ということは、日本を代表する歌なんだと思う。

(一ノ瀬静男)

天壇公園のとてつもないスケールの大きさに圧倒されました。

(木崎利江子)

天候に恵まれ、とても良い思い出に残る経験でした。

(高橋龍太郎)

* 胡同

虎坊橋駅近くの八大胡同を訪ねた。陝西巷にある旧高級鼓楼「上林国際青年旅舎(旧上林仙館)」は、内部の吹抜を回廊と個室が取り囲み、遊郭の雰囲気が残っていて素晴らしかった。この建物を安宿として使用しているとは残念な気がする。

(赤尾吉一)

私の知人 S さんは「北京へ行ったら、胡同へ」としきりにすすめる。だから、その度に行ってみるが、どうしても上部だけで、本当のよさが分からない。そのうちに S さんに案内してもらいたいものだ。

今回は、陝西巷にある旧高級鼓楼を訪ねたが、最初はなかなか見つからなかった。しかし赤尾さんの執念で辿り着くことができたが、映画のセットみたいに浪漫に満ちて素晴らしい所だった。

(ほしひかる)



【上林国際青年旅舎】



* 京劇

歌舞伎、京劇、歌劇、ミュージカルなど世界には【劇+舞踏+歌】から成る伝統芸術がある。しかも歌舞伎、京劇、歌劇はともに17世紀頃に芽生えているところが面白い。

江戸っ子が育てた歌舞伎は、江戸蕎麦と似たところがある。江戸歌舞伎は型を重要視した。わが江戸蕎麦も食べ物なのに味覚の美味しさより、コシなどの物理的な美味しさとか、食べ方の恰好良さ、つまり粋を大事にした。



【天女散花】

そんなわけで、伝統芸術はいずれもその国の心が染み込んでいる。

京劇もたぶんそうだろうというわけで、北京市内のホテルにある梨園劇場で京劇観劇、演目は「武松打店」「天女散花」「霸王別姫」だった。劇中、美女の羽衣の舞は古典絵画や仏像にも出てくる。この舞から天女が想像されたりもした。また絵にしたいものだと思いながら、鑑賞していた。

(ほしひかる)



【京劇鑑賞】

念願の本場の京劇が鑑賞でき、とても感動致しました。やわらかな身の動き、中国語特有の高い歌声に、長い歴史が感じられました。

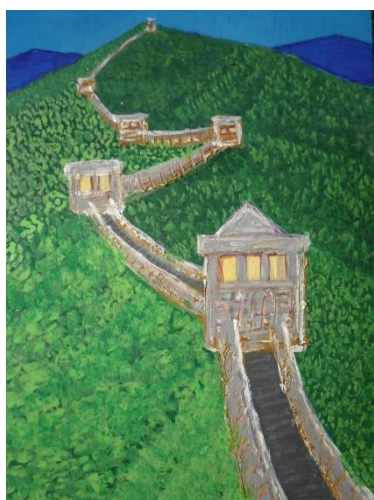
(木崎利江子)

*万里の長城

三国志・ラストエンペラー・西太后・・・程度の中国知識しかない私、勿論私の世代ですから世界史は学びました。

ロープウェイの最終時間が気にかかって一人残り、遠景で見た万里の長城はずっとずっと向こうに見える湖を背景に延々と続いていた。紀元前200年頃、秦の始皇帝に始まり、北の侵入者から自国を守るとされるが、長い年月をかけてあんな巨大な壁、

それは本当に必要だったものなのか、そんな疑問がふつふつと沸き起こってきた。ドイツの東西の壁、



【万里の長城】



【万里の長城・金山嶺】

作ろうとしているメキシコとの国境に作られようとしている難民流入阻止の為の壁のように、その時代に生まれなければ理解しがたい、というより皇帝の気持ちは、私のような庶民には理解できないことなのかもしれない。

(佐藤悦子)

今回の万里の長城「金山嶺」は、観光客が多い北京近郊の長城より、自然と迫力と景観が優れており、行って良かった。

(一ノ瀬静男)

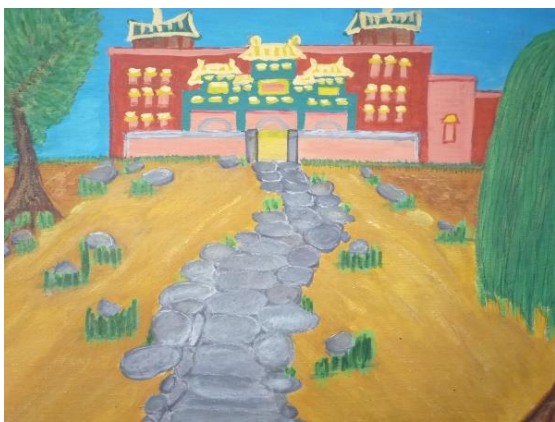
万里の長城はとてつもないスケール、圧倒されて言葉もありません。
(木崎利江子)

万里の長城の時は歩けなかったので一人で残ったが、寂しかった。
(平林知人)

中国の精神史を表現するものは、権威の天壇と、権力の紫禁城だと思う。しかしこの万里の長城とはいったい何だろう？ 防壁か、前線か・・・！
(ほしひかる)

☆避暑承德

*避暑山荘と二寺



【外八廟】

清国皇帝の避暑地である承徳市内散策、食事などすべて満足。乾隆帝の心境や如何に！

(平林知人)

承徳は最低気温-8度 最高気温7度とかなり寒く、避暑山荘湖面は一部凍結していた。警備員は厚手の長いコートで重装備。ラサのポタラ宮を模した普陀宗乘之廟 (Potato) の外観はモダンで、近代都市にあっても違和感がない。

(赤尾吉一)

北京の避暑地ということもあり、この時期は朝晩の気温がかなり低く寒かった。逆に観光客が少なくゆったり観光できたのかと思います。世界遺産指定の景観や文化財を写真に収めました。

(高橋龍太郎)

避暑山荘は、寒かった。避暑地の冬は寒い。広い、中国の大きさを感じた。
(一ノ瀬静男)

夏の離宮ということだけしか知らずに訪れて、その大きさと素晴らしさに中国の力を見せつけられました。

(木崎利江子)

承徳の朝は寒い。朝早く、承徳のホテルの窓から見えた人々の日常の光景ですが、息が白く出るようなまだ寒い時間、リヤカーに解体された骨付き肉をそのまま載せて売っている屋台があった。前の日は果物屋の屋台が出ていた。インド・ラダックを思い出した。ラダックでも肉(多くは鶏肉だった)はそのままケースもないまま台の上に並べられ、計って売られていた。いずれも空気は寒く冷蔵庫も不要な



【承徳の露店】

気候であることもあり、そのような形で扱われている。こんな光景は何百年もの長い間続いてきた日常なのでしょう。

(佐藤悦子)

清の皇帝は、最初の都奉天に行くことがあったが、途中の承德には温泉があり気候は涼しかったため、離宮とした。

その御幸で出会ったのが張三營村の《白蕎麦》であったと伝えられている。

(ほしひかる)

* 磬錘峰

磬錘峰はあの姿で長年聳え立つとは、不思議だ。地震や台風が来る日本では考えられない。久し振りに山登りをした。足腰の運動になった。

(一ノ瀬静男)



【承德磬錘峰】

☆思い出の中国

大北京は中国とは別物だ、と思考たい。一方では地方な中国が残っているらしい。そこが面白いと思う。

今回私たちと接した若いジャーナリストの人たちはとても好感が持てた。明るい未来が待っている。

(平林知人)

前回とは打って変わった青空に恵まれ、快適な天気で観光も楽しめました。北京でも冬になると黒い服装が目立ってきますが、このシーズンには黒マスクが似合います。

(赤尾吉一)

「中国人の主張」・・・私たち日本人は「相手の立場や状況を思い図る」という言葉があるように「疑問」や「不満」に対して直ぐに、直接的に強く訴えるこ

とはあまりしない。それに対し、今回街の中、旅の中でいくつかの中国人の主張を垣間見た。「おかしいんじゃないか！」と思うことに会うと、中国の方は黙っていない。真っすぐ、強く抗議する。これはその人特有ではなく、皆抗議する。持論をぶつくと相手もぶつけてくる。男も女も同じだ。こんな光景に日本人である私は二の足を踏んでしまう。日本人も一言二言は主張するが、相手に通じないとわかると割とあっさり諦める。ぼやくが長いものには巻かれる。彼らはどうしてもわかってもらえない時には近くのカウンターなどを叩いて不満の態度を示す。

これを見ていて、国際社会の中で私たちは疑問や不満をどのように表現すべきなのか、今のままでいいのかを考えさせられた旅でした。

(佐藤悦子)

中国は4年振りに訪問。出かける前にはスマホの普及で買い物はQRコードを使うと日本で何人かにアドバイスされていましたが、スーパーでは現金で買い物OKでした

北京で市内から蟹島へ戻る時に乗った白タクの運転手は、60歳代の男性。日本人には好感を持ってない反日感情をあらわにしてました(通訳を介して)。中国の現実を実感。そういえば、往復JAL便を使った際、搭乗口は北京空港内で一番遠い位置でした。

トランプ政権と習政権の間では安全保障や貿易面など多くの分野で大小さまざまな問題を抱えています。我々民間レベルでの日中蕎麦交流が両国民の友好関係改善に役立てたら幸いだと思います

(高橋龍太郎)

事前にイメージしていた中国の人々の生活より、食生活が豊かで、美味しいだけでなく、ナッツや野菜を多用して栄養的にも優れていると思いました。

(木崎利江子)

モンゴル系の方は体格も声もでかい。

ドライバーを務めてくれた孫さんは、「孫士敬さん」です。今回の事務方として孫前進先生をかなりサポートされました。ありがとうございました。

(一ノ瀬静男)

以上